様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年４月１８日現在

機関番号：１６１０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５３０９８８
研究課題名（和文）　生きる意味の哲学的探究を根幹にすえた高等学校道徳教育の構築に関する研究
研究課題名（英文）　A Study on the Moral Education in Senior High Schools for Encouraging Students' Philosophical Inquiry into the Meaning of Life
研究代表者
兼松　儀郎（KANEMATSU YOSHIRO）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：00319443

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代社会における哲学的思索の意義をとらえ、高校生が生きる意味を探究し自己省察を深めていくことを根幹とする高等学校道徳教育について、実践的課題を明らかにすることを目的とする。意識調査、高等学校・教育委員会への訪問調査、現職教員との討論等を通じて、生きる意味の探究と人間の成長、知識と行動、体験と自己省察、高等学校公民科「倫理」における哲学的思考等を観点として、実践的課題を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the practical issues for encouraging high school students' philosophical inquiry into the meaning of life. Methods included student surveys, investigative visits to high schools and boards of education, and discussions among teachers. The findings were discussed from the viewpoints as following: inquiry into the meaning of life and human growth, knowledge and daily-life behavior, experience and self-reflection, and philosophical thinking in "Ethics" classes.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2010 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2011 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,400,000 | 720,000 | 3,120,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：生きる意味、哲学的探究、道徳教育、高等学校

１．研究開始当初の背景
(1) 小・中・高等学校の新学習指導要領が告示され（平成 20 年、平成 21 年）、道徳教育については、初等中等教育を通じて人間としての生き方を探究させることの重要性が示された。
(2) 現代社会においては人間としてのよりよい生き方を否定するような問題事例が続出している。現代人の生きる意味の喪失状況に対して、生きる意味の探究を根幹にすえた道徳教育を構想する必要がある。
(3) 学校の教育活動全体を通じて行う高等学校の道徳教育は、系統的な指導内容・指導方法について具体的に検討されていないため、実際の指導が表層的なものにとどまっている。

(4) 「生きる力」は、問題解決能力、豊かな人間性、健康・体力など広範な内容を有する。この「生きる力」の育成が、教育の今日的課題となっている。
(5) 高校生の日常生活における自己省察や生きる意味への問いかけを深化させることが課題となっている。
(6) アメリカ・イギリスにおいては創造的思考や批判的思考を促す指導が重視されているが、日本の社会・文化の特質を視野に入れつつ、高等学校教育における生きる意味の探究を促す必要がある。

２．研究の目的
(1) 高校生の自己の生き方に関する哲学的探究や自己省察の特質について理解し、高校生の生きる意味の探究を深めるためには何が求められるかを明らかにする。
(2) 生きる意味の探究の意義や指導の在り方についての教員の意識を明らかにする。
(3) 教育活動全体を通じて行う高等学校の道徳教育は、学校段階間の接続など教育制度上どのような課題が示されるか、検討する。
(4) 高等学校公民科「倫理」について、哲学的探究を基軸とした指導の可能性について吟味する。
(5) 日本の社会・文化の特質を踏まえると、生きる意味の哲学的探究を促すには何が求められるかを考察する。

３．研究の方法
(1) 先行研究のレビューにより、生きる意味の哲学的探究の現代的意義について明らかにする。
(2) 新高等学校学習指導要領をもとに、特に公民科「倫理」の指導内容･指導方法について、生きる意味の探究や自己省察の深化の視点から考察する。
(3) 高等学校訪問や意識調査により、生きる意味、人間関係、自己と社会とのかかわり、職業観、将来の生き方等について、青年の意識や考え方を把握する。
(4) 現職教員（小･中･高等学校）とのディスカッションや高等学校訪問を通して、児童生徒のニーズや高校生の発達段階に対する教員の理解や道徳教育のとらえ方について理解する。
(5) 高等学校教員や教育行政関係者に対するインタビューにより、生きる意味の哲学的探究を促す高等学校道徳教育の内容構成や指導方法、教育制度上の課題等について意見聴取する。
(6) 高等学校を訪問し、インターンシップ、ボランティア活動等について調査を行い、体験活動と自己省察との関係について考察する。
(7)博物館･美術館等を訪問し、哲学的思索の深化という観点から、ミュージアム見学の教育的意義について考察する。

４．研究成果
(1)生きる意味の哲学的探究の現代的意義
①古来、哲学は「人間とは何か」を問いかけてきた。また、「人間としていかに生きるべきか」は、哲学の根本問題である。生きる意味への問いは、人間に固有のものであり、生きる意味を見出し、また自分の生き方を価値あるものとしてとらえることは、人間の根本的な欲求といえる（フランクル)。哲学とは、「考えながら生きる、生きながら考える」ことを自覚的に遂行する、その思索である（上田閑照)。
②自己の生き方の再構築が行われる青年期においては、これまでの生き方や考え方がゆさぶられ、生きる上で自明視していたことが確実なものでなくなり、自己の生き方についての根本的な問い直しに至る。ここに生きる意味への根本的な欲求が喚起される。
(2)青年の意識や考え方
①大学生対象の高校時代を振り返っての意識調査により、次のことが明らかになった（平成 23 年２月実施)。
　現代の高校生は、「自分はどのように生きるか」「自分はどういう人間であるのか」「友人との関係をよくするにはどうすればよいか」など、自己や他者について高い関心をもっている。しかし、「人間は社会にどのようにかかわるのか」「人間が物事を知るとはどういうことか」「人間にとって芸術とは何か」「これまで歴史はどのように変化してきたのか」など、より普遍的･抽象的な問題については関心が低い傾向にある。
②教員養成課程にある大学生を対象に意識調査を実施し（平成 24 年１月)、高等学校での自分の生き方を考えさせる教育についてどう考えるかを調査したところ、積極的意見と消極的意見との二分化傾向があることが明らかになった。
　積極的意見：「高等学校における道徳は、自分の生き方を考えるきっかけとなるであろう。」「高校生は人間関係のスキルを身に付けたいと思っている。」「小学校･中学校とは異なった視点から考えさせる。」「中学校での道徳教育とは異なった受け止め方をするであろう。」「自分の生き方を考えることは中学生にはむずかしいが、高校生には現実的な問題となる。」
　消極的意見：「高校生には、自分の生き方は自分で決めるので干渉されたくないという意識がある。」「高校生は自分の生き方を深く考えようとしない。」「高校生は自分の考えをもっているので必要ない。」
③高等学校への訪問調査（茨城県・広島県・福岡県・熊本県、平成 22 年 11 月・平成 23

年３月）により、高校生は自分の生き方の拠り所となるものを求めていることが明らかとなった。生きる意味への問いかけを促す教育的な仕組みをどのようにつくり、自己形成を促すかが課題となる。
④高校生に哲学的探究を促す上で、博物館や美術館の見学による効果が期待できる。例えば、西田幾多郎記念哲学館（石川県）は、哲学を身近に、わかりやすく学べ、思索体験も楽しめるミュージアムとなっており、思索のメディア・ライブラリーにおいて示された存在・愛・歴史・人生・私・善・時間・哲学の８つのテーマは、根本的であって、かつ高校生に考える材料を提供できる。また、ガイドブックにある「かつて哲学は、生きることそのものに根ざした、最も身近な「問い」として始まった。」ということばもわかりやすく、高校生に受け入れられやすい。また、鈴木大拙館（石川県）では、「大拙についての理解を深めるとともに、来館者自らが思索する場として利用すること」が目的とされている。盛岡市先人記念館（岩手県）では、豊かな精神文化を築いた先人の人間形成過程を学ぶことができる。
(3)高校教員の意識
①現職教員は、行動へとつながる道徳教育、生き方を考えさせる道徳教育、日常生活に根ざす道徳教育を実践したいと考えている。日常生活において一体何を大切にすべきかを考えさせることに道徳教育の意義があると考え、それゆえに現職教員は日常的な場面で道徳教育の成果を確かめたく思っている。このような考え方は、生きる意味の探究を促す教育への積極的な動因となりうる。
②高等学校では小学校・中学校と比較して、学習指導要領の総則における道徳教育の内容の基準が包括的、一般的なものとなっているがゆえに、個々の高校教員の意識や考え方が道徳教育の実践に影響を及ぼすと考えられる。高校教員にとって重要なのは、道徳教育を視点とするとき、高校教育をどうとらえ、そこからどのような課題意識をもつかである。
③高校教員の道徳教育の実践的指導力を高めるには、日常的な問題意識から出発しながら、人間、教育、道徳について深く考えることが求められる。道徳教育、また道徳の時間をめぐる論点について議論するためには、人間とは何か、教育とは何か、あるいはそもそも道徳教育とは何か、という問いかけが不可欠である。
(4)高等学校道徳教育と教育制度
①各高等学校の校訓や学校教育目標は生き方の哲学的探究の基盤となりうる。高等学校においては、各学校の歴史・伝統、教育方針等が道徳性の育成に強い影響力を有し、各学校の特色を生かした道徳教育の促進要因として位置付けられる。多様化した高等学校においては、とりわけ「各学校」ごとに自校の指導内容を検討吟味して、重点化･焦点化し、到達目標を明確にする必要がある。
②高等学校教育においては、生きる意味の探究を促すために、学校や学科の特色を踏まえつつ、生き方を探究させるための基軸となる時間を設けることが必要である
③道徳教育の充実を図るには、人間の成長と教育制度との整合性を図る必要がある。高等学校における道徳教育においては、青年期における道徳性の発達の特質を踏まえる必要がある。人間としての在り方生き方に関する教育の充実を図るには、小学校段階では生き方の基礎づけを確実なものとし、中学校・高等学校段階では青年としての生き方の探究を促すなど、各学校段階を一貫する系統性が重要であり、教育制度の観点から検討する必要がある。
(5)高等学校公民科「倫理」
①高等学校教育においては、公民科「倫理」が道徳教育の中核的な場面となる。「倫理」の学習においては、自己の生き方や自己の生きる課題と結び付けながら、先哲の考え方を手掛かりにして、現代の倫理的課題を探究し、自己の確立を促そうとする。このような自己形成過程において求められるのが思考力・判断力・表現力等であり、また、このような探究活動によって思考力・判断力・表現力等が育成される。自己の確立と、思考力･判断力・表現力等の育成とが一体となっているといえる。
②生きる意味への探究力を育成するには、公民科「倫理」の指導における思考力･判断力・表現力等の育成に着目する必要がある。高等学校公民科「倫理」においては、哲学・倫理･宗教に関する先哲の思想を知識として提供し理解を深めているが、この「知識」を「思考」を媒介として「行動」へとつなげるよう教育内容･教育方法を工夫する必要がある。
(6)社会変化と道徳教育
①経済発展や社会変化にともなう道徳的な価値意識の変容は、生き方を考えさせる道徳教育の在り方についての問題提起となる。例えば、中国における道徳教育には伝統的な儒教思想を土台とするという普遍的な側面があるとともに、急速な社会変化のなかで道徳教育はどうあるべきかという今日的課題がある。このように歴史的･社会的文脈において道徳教育の在り方を究明していくことが重要といえる。
②生きる意味の哲学的探究については、異なった社会・文化に共通する普遍性とともに、日本思想や日本の社会・文化の特質に由来する固有性の両面からアプローチし、未来を切り拓く主体として高校生自らが探究する力を育成することが求められる。

(7) 高等学校道徳教育の構想

①生きる意味の探究と人間の成長

「生きる力」の育成の根幹に「生きる意味」の探究を位置付けることができる。高校生の日常生活における自己省察においては、すでに生きる意味への問いかけが萌芽的に存在しているのであり、いかにこの問いかけを促す教育的仕組みをつくるかが課題となる。生きる意味への問いかけが生きる上で大切なものであることに気付かせることが教育的に重要である。

この問いかけは、自己実現という高次の欲求に関連付けられるものであり、教育的な意図をもって喚起されないと日常生活のなかに埋没する可能性をはらんでいる。それだけに高等学校段階で自覚化・意識化させ、生きる意味の探究の重要性に気付かせる必要がある。すなわち、高校生に生きる意味の探究の意義を自己形成と関連付けて理解させることが重要である。その際、他の存在から区別される個としての自己確立を重視するとともに、他者や社会とのかかわりを通じて自己自身の生き方が形成されていくという面に着目すべきである。他者とのかかわり、社会とのかかわりは、人間存在の全体構造を理解する上で重要な視点であり、他者や社会との現実的なかかわりを通して生きる意味を見出し、このことが人間の成長を促すといえる。

②知識と行動

道徳教育においては、道徳的心情の育成を重視するとともに、道徳的判断には知的な判断力が求められることに着目したい。現職教員は、道徳教育において「考えること」に積極的な位置付けを行おうとしている。高等学校においては、高校生が人間としての生き方や生きる意味について知的に考えることができるよう道徳的思考力を育成することが重要である。

道徳性の育成を行動へとつなげるには、道徳教育を日常生活と関連付けることが重要であり、特に高等学校においては「考えること」を重視する必要がある。高校生が人間としての生き方について知的に考える力を育成することが重要であり、「知ること」「考えること」「行動すること」を相互に結び付け、関連付けた学習過程を構築することが検討される必要がある。

③体験・体験活動と自己省察

実際の生活体験や社会体験によって、人間として生きるとは一体どういうことであり、何を大切にして生きていくことが人間としてよりよい生き方となるのかという探究が促される。現実の体験を通して、例えば、信頼、勇気、寛容などが、人間としてよりよく生きる上で真に価値あることとして身をもって実感できる。すなわち現実を生きる知恵を得ることとなる。現実を生きることそのものが、人間として生きることについての思索を深め、人間としての成長を促すものとなる。

高等学校教育において高校生に生きる意味の探究へと促すには、社会貢献活動など社会体験活動によって社会の一員としての自己有用感を実感させることが重要といえる。ボランティア活動などの体験活動やインターンシップは、社会とのかかわりにおいて自己の生き方を考えさせるチャンスとなる。このような体験活動の後、自己省察の機会を設けることが不可欠である。自分自身の体験や学校の教育活動としての体験活動をもとに、自己の生き方や他者とのかかわりについて思索を深めることにより、自己の意志や行動について、道徳的見地から考える力を身に付けることができる。自己概念は体験によって深化していくことに、高校生自らが気付くことができる。体験や体験活動は、自己の生きる意味を探究するきっかけとして位置付けることができる。

④高等学校公民科「倫理」における哲学的思考

高等学校公民科「倫理」の学習においては、先哲の思想を手掛かりとして自己の生き方を探究することが重要である。「倫理」においては、人間はどのような存在としてとらえることができるか、人間として自分はいかに生きるべきかを探究する。このような人間の存在と価値にかかわる哲学的な問題を考えるには、先哲の見方や考え方が手掛かりとなる。「倫理」の学習においては、日常生活において、また非日常的な事態において、人間としての生き方という観点から、倫理的な見方や考え方を身に付けさせることが重要である。

現代社会が直面する生命、環境、情報等に関する倫理的な課題についても、高校生の生き方と連動しており、生きる意味の哲学的探究は、社会形成の主体としての成長を促すものとなりうる。生きる意味の探究においては、人間存在についての先哲の見方や考え方を手掛かりとして、自分は人間として一体どのようなことを大切にして生きていくのかを考えることが重要となる。自己の価値観について、主体的に考えさせ、多面的・多角的に考察させるためには、他の人との話し合いなどを通して、自分の選択基準・判断基準を省察することが重要である。

「倫理」は、教科学習として生きる意味の哲学的探究を促がす積極的な役割を担うことができる。先哲の思想を手掛かりとする哲学・倫理の基礎概念の習得は、倫理的な見方や考え方を身に付け、自己の生き方を批判的に吟味する力を高め、将来の生き方について判断する上で視野を拡げるものとなる。教科学習として、特に知識・理解、思考・判断・

表現という観点から、「倫理」の学習の系統性を検討する必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①兼松儀郎「道徳性の育成をめぐる現職教員の課題意識－教職大学院における授業実践を通して－」関西教育学会『関西教育学会年報』、査読無、第 35 号、2011 年、pp. 91-95
②兼松儀郎「思考力・判断力・表現力等の育成と生きる力－高等学校公民科「倫理」の指導を中心に－」文部科学省『中等教育資料』、査読無、第 890 号、2010 年、pp. 22-27
③兼松儀郎「規範意識を育む教育の推進－社会を形成する自己の生き方－」徳島県教育会『徳島教育』、査読無、第 1133 号、2010 年、pp. 6-8

〔学会発表〕（計５件）
① Kanematsu, Yoshiro. Cultivating Morality in High School Students through Competence in Moral Thinking: Universality and Uniqueness of Japanese Moral Education. International Conference on Moral Education, October 25, 2011. Nanjing International Conference Centre, China.
②兼松儀郎「生きる意味の哲学的探究を促す高等学校道徳教育」日本道徳教育学会第 77 回大会、2011 年 7 月 3 日、長崎県：長崎大学
③兼松儀郎「道徳性の育成をめぐる現職教員の課題意識－教職大学院における授業実践を通して－」関西教育学会第 62 回大会、2010 年 11 月 13 日、兵庫県：関西学院大学
④ Kanematsu, Yoshiro. Continuity and Discontinuity of Moral Education in Japan: Encouraging High Schools to Make Moral Education Relevant. The Fifth Conference of the Asia Pacific Network for Moral Education, June 12, 2010. Nagasaki University, Japan.
⑤兼松儀郎「青年期における社会とのかかわりと自己形成」日本道徳教育学会第 73 回大会、2009 年 6 月 28 日、神奈川県：日本大学

〔図書〕（計２件）
①兼松儀郎「教育の現実のなかで教育を考える－青年の教育をめぐって」和田修二・皇紀夫・矢野智司編『ランゲフェルト教育学との対話－「子どもの人間学」への応答』玉川大学出版部、2011 年、 pp. 284-300（共著）
②兼松儀郎、日本公民教育学会編『公民教育事典』第一学習社、2009 年、「公民教育と道徳教育」pp. 20-21、「倫理学習のカリキュラム」pp. 116-117（分担執筆）

６．研究組織
(1) 研究代表者
兼松　儀郎（KANEMATSU YOSHIRO）
鳴門教育大学･大学院学校教育研究科･教授
研究者番号：００３１９４４３
(2) 研究分担者
なし
(3) 連携協力者
なし